

## シェイクスピア悲劇の女性たち

郡司 郁

日本大学大学院総合社会情報研究科

## The Women in Shakespearean Tragedies

GUNJI Fumi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

The women who appeared in the four Shakespearean tragedies are indispensable to the story of the tragedies. However, I wonder what Shakespeare demanded of the women, and what kind of the women image he wanted to create. In this paper, I tried to discuss these things.

As a result, on the one hand, I made it clear that Shakespeare eliminated the woman sexuality from Ophelia, Desdemona, and Cordelia and I concluded they are the idealized women in religion. On the other hand, I also made it clear that Shakespeare depicted Goneril, Regan, and Lady Macbeth as evil women who deviated from ethics and religion.

---

### 1.はじめに

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) の悲劇作品に登場する女性たちに関しては、17 世紀から現代に至るまで様々な角度から研究がなされてきた。彼女たちは皆美しく、無念の死を遂げる運命が与えられているが、男性主人公の悲劇に大きく関わり、むしろシェイクスピア作品の悲劇性を深めるのに重要な役割を担っていると考えられる。

ハムレット (Hamlet) にとって恋人オフィーリア (Ophelia) や母ガートルード (Gertrude) といった身近な女性の存在がなくては、彼特有の憂鬱さは生まれなかったに違いない。<sup>1</sup> もちろん、ハムレットの苦悩の中心は父である先王が叔父によって殺害されたという事実であるが、それと共に女性たちの存在は彼の憂鬱さに大きな影を落としているのも事実である。

『オセロ』 (Othello) の悲劇に至っては、デズデモナ (Desdemona) の存在が無くてはイアーゴ (Iago) の奸計もオセロの怒りと嫉妬も生じず、悲劇そのものが成立しないことになってしまう。またデズデモ

ナという非の打ちどころのない女性が無実の罪で殺害されるという筋もオセロの悲劇をいっそう深めることに役立っている。<sup>2</sup>

また『リア王』 (King Lear) の娘たちのうちゴネリル (Goneril) とリーガン (Regan) に関してはその悪女的性格がリアの悲劇を生じさせ、またコーディリア (Cordelia) の実直すぎる性格がリアの愚かさを浮き彫りにさせている。<sup>3</sup>

『マクベス』 (Macbeth) も然りである。魔女たちの予言があったとしても、マクベス夫人 (Lady Macbeth) の強力な後押しがなかったとしたら、マクベスが王殺しを実行することはなかったかもしれないのである。<sup>4</sup>

上記のように、悲劇の主人公の周囲にいる女性たちは作品に不可欠な人物たちなのであるが、彼女たちは表面的な悲劇のストーリー上での関わりだけではないはずである。もっと本質的なところで彼女たちの存在意義は何なのであろうか、シェイクスピア

---

<sup>1</sup> William Shakespeare, edited by Harold Jenkins, *Hamlet*, (Methuen, 1982)

<sup>2</sup> William Shakespeare, edited by M. R. Ridley, *Othello* (Routledge, 1992)

<sup>3</sup> William Shakespeare, edited by Kenneth Muir, *King Lear* (Routledge, 1972)

<sup>4</sup> William Shakespeare, edited by Kenneth Muir, *Macbeth*

は彼女たちを通してどのような女性像を表現したかったのであろうかなど、いくつかの疑問が生じてくるのである。また各作品だけにとどまらず、四大悲劇を一つの作品群ととらえたとき、これらの女性たちに共通する傾向はあるのかなど、まだ議論の余地が残されている感がある。

したがって、本稿ではこれらのことについて分析し、考察することを試みたい。

## 2. オフィーリアからデズデモナまで

### 2.1 オフィーリア

まずはじめに『ハムレット』を取り上げたい。『ハムレット』は四大悲劇の中でも、例外的に宗教色の濃い作品だと言われている。そしてそれは、作品中の女性たちの人生にも表れている。

オフィーリアは、ハムレットの恋人であったが、先王の死とガートルードの早すぎる再婚で傷心のハムレットにつれなくされ、また父ポローニウスがハムレットに殺害されるという事件もあり、正気を失って自ら命を落とすという薄幸のヒロインで、あまりにも有名である。

恋人ハムレットは母ガートルードの近親相姦的再婚によりアイデンティティーを喪失し、母への幻滅が女性全体の幻滅や軽蔑へとつながっていく。

*Ham. Why, she would hang on him*

*As if increase of appetite had grown*

*By what it fed on; and yet within a month*

*Let me to think on't Frailty, thy name is woman*

(I. ii.)<sup>5</sup>

このように、母への幻滅が女性全体への幻滅へと発展し、女性全体の否定となってしまうのは明らかである。したがって、ハムレットは母ガートルードによってもたらされた女性の性の部分の否定を恋人オフィーリアにも求めてしまい、彼の女性観は性を全く排除した極端に潔癖さのみを追求したものとなってしまう。

*Ham. Get thee to a nunnery. Why, wouldst thou be a breeder of sinners? I am myself indifferent honest, but yet I could accuse me of such things that it were better my mother had not born me.*

(III. i.)<sup>6</sup>

結局のところ、『ハムレット』におけるオフィーリアの主要な役割は、主人公ハムレット王子の美しい恋人でありながら、しかし乙女としての性を完全に否定された女性という役割である。つまり、性的ではない完全なる乙女である。

これをキリスト教の側面から考察すると、カトリックは女性の処女性を重んじることから、オフィーリアはそのカトリック的女性観がさらに極端に徹底化された姿とも捉えることもできる。すなわち、肉体的な処女性だけではなく、精神的な処女性も厳しく求められる、宗教的に理想化された女性である。

ジュリエット・デュシンベリーはハムレットにピューリタンの潔癖さがあると述べたように、ハムレットの思考はもはや女性の性的な部分を完全に否定している。<sup>7</sup>

シェイクスピアが『ハムレット』を執筆した時代は、イギリス国内は当然英国国教会が中心であり、エリザベス1世の国策によりさらに国教会が強化されてきていた。しかしながら、国教会は離婚を認めてはいるものの教義はカトリックの教義と大きな差異はないことから、シェイクスピアがカトリック的な厳しい処女性の象徴であるオフィーリアを描いたことは何ら不自然ではないだろう。<sup>8</sup>

### 2.2 ガートルード

このオフィーリアと対極に見られるのはガートルードである。ガートルードはハムレットの父、先王

<sup>6</sup> William Shakespeare, *Hamlet*, III. i. 121-24.

<sup>7</sup> ジュリエット・デュシンベリー著、森祐希子訳、『シェイクスピアの女性像』(紀伊国屋書店、1994年)、p. 141-43

<sup>8</sup> 当時の再婚は配偶者の死別後、一年間再婚できないという慣例があった。カトリックでは離婚が認められていなかった。(George Duby and Michelle Perrot, *Storis Delle Donne in Occidente*, 杉村和子、志賀亮一 監訳『女の歴史 III16-18 世紀 1』[藤原書店、p.117, 1995])

<sup>5</sup> William Shakespeare, *Hamlet*, I. ii. 143-46.

の死後、王の弟であったクロードiasと近親相姦的な再婚をする。先王の死後、義理の弟と再婚するということが、またそれが先王の死後間もなく再婚するということが、息子ハムレットが精神不安に陥る重要な要因の一つになっている。

後述するが、『リア王』のゴネリルやリーガンと異なり、ガートルードのこの不貞と同等とみなされる行動は彼女自身に何ら罪の意識が無いことが特徴である。オフィーリアもそうであるが、『ハムレット』の女性たちは自分自身に意志や意図を持たずに行動していることが最大の特徴である。

ゴネリルやリーガンは善悪の問題は別にしても、彼女たちは自身の意志や感情に忠実である。それに対してオフィーリアは父と兄、恋人の意見に従うばかりで身を滅ぼし、ガートルードもまた現王クロードiasの言いなりであり、先王によりコントロールされている息子ハムレットの意見に心痛めるのである。

このように、ガートルードの再婚問題は、彼女自身が不貞を意識して行動した結果ではなく、ハムレットにより激しい罪の糾弾を受けてから次第に自分の罪に気付いていくという設定である。

*Ham.* O shame, where is thy blush?

Rebellious hell,  
If thou canst mutine in a matron's bones,  
To flaming youth let virtue be as wax  
And melt in her own fire; proclaim no shame  
When the compulsive ardour gives the charge,  
Since frost itself as actively doth burn  
And reason panders will.

( III. iv. )<sup>9</sup>

*Queen.* O Hamlet, speak no more

Thou turn'st my eyes into my very soul,  
And there I see such black and grained spots  
As will not leave their tinct.

( III. iv. )<sup>10</sup>

「洗っても落ちないどす黒いしみ」とはまさしく近親相姦的な早すぎる再婚を意味している。上記の引用のように、ハムレットに糾弾されるまでガートルードは自分の罪には全く気付いていなかった。しかしながら、ハムレットにより自分の罪に気付かされ、神の視点に引き戻されていく。それはつまり、クロードiasとの関係ではなく、彼女が再びハムレットとの親子関係を回復し、性的な女性ではなく「母」という存在になっていったことに他ならない。

したがってこのように解釈してくると、ガートルードもまたオフィーリア同様に、決してオフィーリアの対極に置かれた悪女ではなく男性たちに翻弄された哀れな女性の一人なのである。

彼女もまた、息子ハムレットにより女性としての性を完全に否定され、母としてのみ生きることを強制された女性である。この点において、オフィーリアとガートルードは非常に類似している。オフィーリアもガートルードも女性性をハムレットから強制的に否定され、女性として自由に生きることは悪であると断罪されている。このことは、カトリック的、あるいは国教会的にかかわらず、キリスト教の規範、もっと大きくとらえると宗教的規範の中に厳しく押し込められ、身動きがとれない女性たちが表現されているように思えてくるのである。キリスト教は本来、性を肯定している宗教であるが、ハムレットの女性観は男性が女性性を厳しく管理しようとするあまりの極度に歪められた性の形と言えよう。

オフィーリアは結婚前の適齢期の女性であった。そのため、女性としての結婚生活をハムレットに否定されてしまうことは、彼女にとって自死する他に選択の余地はなく、やはり一番の犠牲者であり観客や読者の哀切さを誘うのは間違いない。彼女の自殺の先は何の魂の救済もなく暗闇である。

一方、ガートルードはすでに家庭をもち子供もいることから、死ぬことで再婚前の家庭へと回帰していく。この点はガートルードの死はオフィーリアの死と大きく異なる点である。

以上のように、オフィーリアには完璧な処女性を、ガートルードには完璧な母性を追究することで、シェイクスピアは彼女たちの女性性を否定して描こうとしたのではないだろうか、と考察できる。この性

<sup>9</sup> William Shakespeare, *Hamlet*, III. iv. 81-87.

<sup>10</sup> William Shakespeare, *Hamlet*, III. v. 88-91.

を排除した完璧性というものは、デズデモーナに引き継がれていくのである。

## 2.3 デズデモーナ

デズデモナは無実の罪で夫オセロから殺害される『オセロ』のヒロインである。彼女にもまた、ガートルード同様に不貞の罪という疑念がかけられるが、ガートルードとは異なり、彼女は弁明する時間も与えられずに無実の罪で死んでゆく。

ガートルードの場合は先夫の死後の行動、デズデモナは夫の存命中の行動が不貞問題となっていることに相違点はあるものの、どちらの場合も既婚の女性の貞淑さという性的問題を扱っていることに関しては類似している。

青山誠子が述べているように、シェイクスピア作品は既婚女性に貞淑さを求め、不貞の問題を大きく取り扱っている感を受ける。<sup>11</sup>それは、シェイクスピアはカトリックだったかもしれないと考えたとき、女性の登場人物に厳正な貞淑さを求めたことは自然なことだったかもしれない。

オフィーリアやガートルードがそうであったように、デズデモナもまた性を否定された存在である。つまり、彼女はオセロの妻であることのみを求められており、他の男性と個人的に会話することさえも許されていない。

キャシオーは夫オセロの部下であり、オセロも彼に信頼を寄せ、一目置いている人物である。しかし、彼は酔ったはずみで誤って傷害事件を起こしてしまったことで、オセロの部下から外されてしまう。傷心のキャシオーが再びオセロの部下になれるように、デズデモーナは上官の妻としてオセロとキャシオーの仲をとりもとうとするが、その行為が結局は裏目に出てしまう。

Cas. Yet I beseech you,  
If you think fit, or that it may be done,  
Give me advantage of some brief discourse  
With Desdemona alone.

(III. i.)<sup>12</sup>

*Des.* Be thou assur'd, good Cassio, I will do  
All my abilities in thy behalf.

( III. iii. )<sup>13</sup>

つまり、キャッシューとの関係は上官の妻と部下というだけで、デズデモーナは全く潔白であったにも関わらず、イアーゴの策略によりオセロは妻デズデモーナとキャッシューとの関係を疑いはじめ、その疑いは殺害にまで及んでしまう。

この悲劇はイアーゴの悪計やオセロの愚かなまでの極端な誤解が積み重なって生じた悲劇である。しかしながら、デズデモナ側の問題点を考察すると、デズデモナがはじめからキャシオに情をかけたか会話をしたしなかったならば、イアーゴがつけいる隙も、オセロが誤解することもなかったわけである。

このように考察してみると、彼女もまたオセロやイアーゴといった周囲の男性から完璧な妻であることを求められていたと言える。完璧な妻とは、夫以外の男性との関係を全く疑われることのない、夫以外の男性とは全く接触をもたない、完全に夫との性にのみ生きる妻である。

既婚女性の不貞や姦淫の罪はキリスト教に限らず重罪であるが、それにしてもデズデモーナが求められた貞淑さは徹底して厳しいものである。デズデモーナは善人であり、十分に貞淑であったにも関わらず、イアーゴに隙を与え、夫に疑われるような行動をとったということが彼女の過ちで、悲劇の発端であったと解釈するならば、シェイクスピアはオフィリアやガートルードよりも更に究極の理想化された女性の姿をデズデモーナに求めたと言えるのではないだろうか。もっともここでの理想化された女性とは、男性が宗教的規範の中に女性を押し込め、男性に都合よく理想化した女性像のことである。

<sup>11</sup> 青山誠子、『シェイクスピアの女たち』、(研究社、1981年)、p. 82.

<sup>12</sup> William Shakespeare, *Othello*, III. i. 51-54.

<sup>13</sup> *Ibid.*, III. iii.1-2.

## 2.4 『ハムレット』と『オセロ』の厳格さ

これまで『ハムレット』のオフィーリア、ガートルード、『オセロ』のデズデモナーナを通して、それぞれの女性たちが求められた女性の性的な部分の否定について考察し、女性の貞節の問題がいかに重要視されているかを明らかにした。このことは宗教的な貞節が厳しいまでに徹底的に作品の女性たちに求められ、それらが悲劇の主要なテーマになっているといっても過言ではない。

ハムレットの憂鬱さの要因は母ガートルードの再婚が大きく影響していることは言うまでもなく、オセロの増大する嫉妬も妻デズデモナーナがキャシオーと話しをしていることが原因である。

『ハムレット』と『オセロ』に登場する女性たちは共通して罪の意識はなく、デズデモナーナに関しては彼女自身が罪を犯したのではなく、彼女の行動を故意に曲解し、陥れたものである。

したがって自ら意識的に不貞を犯しているわけではなく、結果として不貞とみなされる行動をしてしまった女性たちである。その点から見れば、これらの女性たちは意志を持って行動するほどの悪意はなく、男性たちに翻弄される女性たちと解釈することもできるし、またキリスト教の不貞の罪に関して厳格にも理想化された女性像の姿を求められた女性たちとも言える。それは作者シェイクスピアという男性の理想像と解釈することもできるし、当時の社会通念の理想像と解釈することもできるが、宗教的に解釈するならば、ジュリエット・デュシンベリーが述べたようにピューリタンの厳格さというものが『ハムレット』のみならず『オセロ』にまで及んでいると考えることが妥当だろう。

しかしながら、四大悲劇の3作品目である『リア王』からその傾向は変化してきているように思える。次に『リア王』の三人の娘たちを分析する。

## 3. 『リア王』の娘たち

### 3.1 ゴネリルとリーガン

ゴネリルとリーガン、そしてコーディリアに関しては前述したオフィーリアやガートルード、デズデモナーナとは明らかに異なった様相を呈している。それは、オフィーリアやガートルードは父兄、夫、恋

人といった周囲の男性たちにリードされ、彼女たちの運命は男性たちに委ねられている。またデズデモナーナに関しては、父の反対を押し切って結婚するなど自己主張する女性という一面も持ち合わせているのだが、結局は夫オセロの冷遇に一喜一憂し、オセロとイアーゴに翻弄される女性である。

それに対して『リア王』の三人の娘たちは、善悪は別にして声を持つ女性たちであり、決して男性に振り回される女性たちではない。むしろ劇全体の主導権を持つのは父リアでも彼女の夫たちでもなく、明らかに彼女たちである。

中でも前述の二作品の女性たち、すなわちオフィーリアやガートルード、デズデモナーナと大きく異なるのはゴネリルやリーガンの貞操観の描き方である。

彼女たちは冒頭の土地分与の場面から強欲であり、父リアを自分たちの城に来ては非情なまでの冷遇をする悪い娘の典型として描かれる。これは種本の一つとされる作者不明の『レア王』(*The True Chronicle of King Leir and His Three Daughters*)の物語でも同様に書かれており、三姉妹のうち姉二人が悪女で末娘が孝行娘という構成はシェイクスピアのオリジナルではない。

では『レア王』にはないシェイクスピアのオリジナルティーはどこにあるのだろうか。それはグロスター家の物語である。『リア王』はダブル・プロットが特徴であり、劇全体に幅と深みを与えているとの評価が定着しているが、このサブ・プロットこそがシェイクスピアの独自性がうかがえる重要な部分の一つである。そして、このグロスターの庶子エドマンドの愛情をめぐるゴネリルとリーガンの行動はゴネリルの夫アルバニーをも巻き込みながら、これまでのガートルードやデズデモナーナの無意識的な不貞問題とは異なり、顕在化された不貞問題へと発展していることは注目に値する。

Gon. [Aside.] I had rather lose the battle than that sister  
Should loosen him and me.

(V. i.)<sup>14</sup>

<sup>14</sup> William Shakespeare, *King Lear*, V. i. 18-19.

ここでゴネリルの口からリーガンに対する対抗心が露骨に表現される。ゴネリルは夫のある身でありながらエドモンドとも関係しようとしており、彼女の強欲さはガートルードなどとは比較にならないほどである。一方で、リーガンに関しては夫コーンウォール公の死後ではあるが、彼女もまた堂々とエドモンドに対して自ら結婚を申し込む態度は、ガートルードの受け身の再婚とは対称的である。

Reg.                   …                   General,  
Take thou my soldiers, prisoners, patrimony;  
Dispose of them, of me; the walls are thine;  
Witness the world, that I create three here  
My lord and master.

( V. iii. )<sup>15</sup>

そしてゴネリルの夫アルバニーの口からゴネリルとエドモンドの結婚の約束が語られており、女性が男性をリードするというこれまでとは逆転する構造になっている。

Alb.                                           [Pointing to Goneril.  
For your claim, fair sister,  
I bar it in the interest of my wife;  
'Tis she is sub-contracted to this lord,  
And I, her husband, contradict your banes.  
If you will marry, make your love to me,  
My lady is bespoken.

( V. iii. )<sup>16</sup>

このようにゴネリルとリーガンを通して、シェイクスピアは『ハムレット』や『オセロ』にはなかったもっと露骨な表現で不貞を描いたのである。

彼女たちはガートルードのように息子から不貞の罪を糾弾されて改心するのでもなく、デズデモナのように潔白にも関わらず夫からの不貞の疑惑を持たれ翻弄されるのでもない。彼女たちがエドモンド

と公然と行った不貞は、不貞に気付かなかったのでも、少々の良心の呵責があったのでもなく、罪という認識の欠如、もっと言えば倫理観や宗教観の欠如を露呈しているのである。

そしてこの二人の姉妹の持つ野心や強欲さは『マクベス』(Macbeth)のマクベス夫人に通じていくようである。

### 3.2 コーディリア

末娘コーディリアは善人であり、オフィーリアやデズデモナの系譜と解釈されるのが適当であるが、彼女の場合もやはりオフィーリアやデズデモナを超越していて、女性として性に対する欲求がまるでない。

彼女にとって恋や結婚はあまり意味がなく、彼女はそれに関してほとんど無関心である。むしろ始めからコーディリアという人物からは性的部分が排除されているかのようなのである。

オフィーリアは結婚前の女性らしく恋の成就を願い、だからこそ恋人ハムレットから冷遇されたときには女性として満たされない性に対する悲嘆があった。また、デズデモナは貞節な妻として描かれているが、一方では父の反対を押し切り愛する男性と駆け落ち同然の結婚をするほどの性に対する情熱があった。

しかしながらコーディリアにはもはや始めから女性としての性に対する欲求は描かれていない。フランス王と結婚はするものの、それは先方から求婚された結果の受け身の結婚であり、コーディリアからの愛情や情熱は何も語られないのである。

コーディリアの関心事は専ら父リアのことであり、夫フランス王に対する愛情は語られないのに対し、父に対する娘としての愛情は作品全体に及んでいる。

Cor. No blown ambition doth our arms incite,  
But love, dear love, and our ag'd father's right.  
Soon may I hear and see him!

( IV. iv. )<sup>17</sup>

<sup>15</sup> Ibid., V. iii. 75-78.

<sup>16</sup> Ibid., V. iii. 84-89.

<sup>17</sup> William Shakespeare, *King Lear*, IV. iv. 27-29.

ここで使われる「love」という言葉は当然ながら父を想う親子の愛情を指しており、コーディリアの最大の関心事は父親であるということが示唆されている。

このように、オフィーリアやガートルード、そしてデズデモナが男性から強制的に性を排除させられたのとは違い、コーディリアの場合はもはや始めから女性性を超越した存在として描かれており、キリスト教的観点で解釈するならば、彼女は性的なものを一切感じさせない理想化された人物、すなわちシェイクスピアはコーディリアを聖なる存在として登場させたと解釈しても過言ではないだろう。それは『ハムレット』から始まり『オセロ』、『リア王』と続く四大悲劇の作品群を創作する過程で発展していった真善美にして聖なる女性像の系譜の最終的到達点がコーディリアという女性なのである。

ゆえに『リア王』はその作品の中において、ゴネリルとリーガンのような悪女とコーディリアという聖女、これら両極に置かれた女性たちが登場しているのである。このことがまた、『リア王』が四大悲劇の中でも悲劇の頂点とみなされる要因の一つとなっていると言えるであろう。

## 4. 『マクベス』の女性たち

### 4.1 ゴネリルとリーガンから始まる悪女の系譜

オフィーリアからコーディリアに至る女性たちが聖女の系譜とするならば、ゴネリルやリーガンに始まりマクベス夫人に受け継がれるのは悪女の系譜である。象徴的なのは『マクベス』に登場する魔女たちである。

ゴネリルやリーガンは自己中心的であり、財産問題に関しても男女の愛情問題に関してもどこまでも強欲である。結果として彼女たちは死ぬ運命にはあるが、生前彼女たちは男性たちの中心に位置しており父リアをはじめ周囲の男性たちは彼女たちに翻弄されるのである。

マクベス夫人も同様である。マクベス夫人には不貞問題といった側面は見られないが、彼女の欲望、野心が夫マクベスを突き動かしていることは間違えようのない事実である。ダンカン王殺しという恐るべき行動は魔女の予言も重要なきっかけではあるが、

魔女の予言を受けてさらに王殺しに拍車をかけたのは紛れもなくマクベス夫人である。マクベス夫人がマクベスを執拗に王殺しへと説得させる台詞には魔女以上のおどろおどろしさがある。

*Lad. I have given suck, and know  
How tender 'tis to love the babe that milks me:  
I would, white it was smiling in my face,  
Have pluck'd my nipple from his boneless gums,  
And dash'd the brains out, had I so sworn as you  
Have done to this.*

(I. vii.)<sup>18</sup>

彼女の性格は A. C.ブラッドリーも述べているように、勇気と決断力があって剛毅であるが、非人情でもある。<sup>19</sup> 彼女は王殺しに関して反逆や邪道といった罪の意識は全くなく、世間の非難や憎悪に怖気づくことも全くない。彼女の類まれな勇気と決断力は善に基づいたものでは全くないが、彼女の中に悪や罪という観念、良心というものは全くないのである。

この罪の意識の欠如という点において、マクベス夫人は前述のゴネリルやリーガンと共通している。ゴネリルやリーガンはエドマンドをめぐる不貞の罪意識の欠如であるが、マクベス夫人は王殺害の罪意識の欠如である。キリスト教において不貞の罪は大罪であるが、それ以上にマクベス夫人の王殺害における罪は個人レベルの罪ではなく、国家レベルの重罪であり、何より彼女自身で手を下すのではなくマクベスに手を下させるという狡猾さはイアーゴと通底するものがある。

シェイクスピアはマルコムに彼女を「鬼妃」(fiendlike queen)と呼ばせているように、マクベス夫人の悪女ぶりは観客や読者を圧倒する。<sup>20</sup> 魔女の登場に始まり、作品『マクベス』の特異な恐怖感是他

<sup>18</sup> William Shakespeare, *Macbeth*, I. vii. 54-59.

<sup>19</sup> A.C.ブラッドリー著、鷲山第三郎 訳『シェイクスピア悲劇の研究』、pp. 384-97 (A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, Macmillan, London, 1904)

<sup>20</sup> William Shakespeare, *Macbeth*, V. iii. 69.

の三作品の例をみない。魔女の存在から明白であるように、この『マクベス』は一貫して切迫した恐怖感と陰惨さに満ちている。

そこには神にも通じる聖なる人物の存在がない。『ハムレット』にはオフィーリア、『オセロ』にはデズデモーナ、そして『リア王』にはコーディリアという聖なる女性たちが登場した。しかしながら『マクベス』にはそれに相当する人物がいないのである。なぜこの聖なる人物がこの作品にいないのかについては、今後『マクベス』の研究をさらに進めていき明らかにしたい。

## 5.終わりに

以上のように、『ハムレット』からはじまり、『オセロ』、『リア王』、『マクベス』とこれら四大悲劇と呼ばれる作品群に共通している一連の流れを検証してきた。それは女性たちにおいて顕著に表れており、一つにはオフィーリアやガートルード、デズデモーナといった宗教的厳格さを男性から強要され、歪んだ形で性の否定を求められた女性たちである。彼女たちは善人ではあるが聖女に達しているわけではなく、性の潔癖さを求められ苦悩する。そうした彼女たちの到達点としてコーディリアがいる。オフィーリアやガートルード、デズデモーナの苦悩は、最終的にコーディリアにおいて結実し、言いかえれば、善なる女性たちが聖女にまで引き上げられ理想化されたと言っても過言ではないだろう。コーディリアはシェイクスピアが描く理想の女性像の象徴なのである。

一方で、シェイクスピアは女性の現実的な側面をも描いている。それはゴネリルやリーガン、マクベス夫人といった強欲で罪の概念を持たない、倫理や宗教から逸脱した女性たちである。彼女たちは前述のコーディリアたちのグループからみれば悪女と位置づけられるが、彼女たちにこそ女性の本質、あるいは女性だけにとらわれず誰もが内に秘めている人間の本質というものを我々に示している。彼女たちの強欲さ、神の視点を持たない思考がいかに関心だけでなく周囲の人間も巻き込んで不幸にしていくなか、ということをシェイクスピアは詳細に描いていると言えるのである。

今後はさらに、この『リア王』のゴネリルやリーガンからはじまり『マクベス』のマクベス夫人や魔女たちに繋がる悪女と呼ばれる女性たちについて詳しく分析し、研究を進めていきたい。

(Received: September 30, 2012)

(Issued in internet Edition: November 1, 2012)